

# 外国人児童生徒の 学びを創る授業実践

「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み

齋藤ひろみ (東京学芸大学)・池上摩希子 (早稲田大学)・近田由紀子 (元 浜松市立小学校教員)【編】

「国際化」「多文化化」が進む日本各地の学校教育現場では、どのような日本語支援が行われているのだろうか。地域の特色により、また、現場の持つ「理念」により、様々な実践が展開されているのが実情である。本書では、静岡県浜松市を事例に、学校と地域との連携によって創出される子どもたちの「ことばと教科の学び」を紹介していく。

**実践報告**

**1 視覚的に情報を提供し、興味関心を掻き立てる**

**4年 国語科**

**「アップとルーズで伝える」 「4年3組から発信します」**

光村図書(平成17～22年版)「国語四年下巻」

葵が丘小学校での実践：水谷晶子

**1 対象児童生徒……小学4年生3名**

3名ともブラジル国籍で、母語はポルトガル語。滞日期間は約3年である。来日後、ブラジル人学校に通学していたが、小学3年の3学期に公立小学校に編入し、在学期間は10カ月程度である。日本語を聞き取る力はあるが、口頭表現の力はあまり十分ではない。日本語の語彙が少ないため、母語による支援が必要などがある。

**2 目標**

「アップとルーズで伝える」は、テレビの映像方法「アップ」と「ルーズ」のそれぞれの特徴を対比的に述べた説明文である。「4年3組から発信します」はその文章を読み取った上で、伝えたいことを考えて、情報の収集から発信までを、自ら行う表現活動である。目標は次のように設定した。

**単元目標** 伝える目的によって、情報の材料の選び方や表現方法が異なっていることに気づき、自分の表現に役立てようとする。

**日本語の目標**

- ・「アップ」と「ルーズ」にどんな違いがあるかを読み取ることができる。
- ・伝える目的に応じて「アップ」と「ルーズ」の写真を選び、短い文章で表すことができる。「しかし、でも」などの接続詞や疑問文の表し方、説明文における「このように」の役割や用い方を理解することができる。

**3 学習指導計画……9時間**

3-1 全体の流れ (★：本事例で紹介する部分)

活動	支援の工夫
①「アップ」と「ルーズ」の違いを理解する。(3時間：取り出し)	・いろいろな写真を「アップ」と「ルーズ」に分け、違いや共通点を話し合う。
②「アップとルーズで伝える」を読む。 1)「アップ」と「ルーズ」とは何かを理解する。 2)「アップ」と「ルーズ」で伝えられること、伝えられないことを挿絵として掲載されている写真から読み取り、それぞれの特徴を理解する。★ 3)全体の要旨・構成を理解する。(3時間：取り出し)	・リライト教材を準備し、活用する。 ・挿絵の写真からわかることを、教科書の内容と結びつける。 ・動作化を促し、具体物を提示する。 ・教科書の記述内容をそのまま抜き出して書くことで完成させられるワークシートを用意する。
③「4年3組から発信します」を読み、日本語教室からの新聞作りをし、記事を発表する。(3時間：取り出し)	・いろいろな写真から伝える目的に応じて写真を選ぶことで、文章が書けるようにする。 ・個別に話し合いながら、主語・述語の関係が明確な短文をつくる。

3-2 活動のねらい (★の活動)

**教科** 「アップとルーズ」でわかることとわからないことを教材文から探したり、ことばの意味を話し合ったりしてワークシートに書くことができる。

## 目次

### 第1部 浜松市の外国人児童生徒教育の現在

#### 第1章 浜松市の外国人児童生徒をとりまく状況

#### 第2章 日本語教室における外国人児童生徒の学習支援

—第2部の授業実践を読み解くために—

### 第2部 実践事例—「ことばと教科の力」を育む授業—

#### 第3章 子どもたちの「学習への興味関心」を喚起する

#### 第4章 子どもたちの「思考・判断」を促す仕掛けをつくる

#### 第5章 子どもたちの「理解・表現」を支援する

#### 第6章 子どもたちの「関係性を広げる」学びの場をつくる

### 第3部 インタビュー —学校と地域支援とのつながりと広がり—

2015年6月刊行  
定価＝2,200円＋税  
ISBN978-4-87424-662-7

全国の書店・  
インターネット書店で  
お買い求めください。

くろしお出版

113-0033  
東京都文京区本郷 3-21-10  
TEL 03-5684-3389

